あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に**生ひ出で**
連体修飾格　連体修飾格　副詞　下二・用
たる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに
完了「たり」体　副詞　係助　係助　形容詞・用　過去推量「けむ」体　副詞
思ひ始めけることにか、世の中に物語といふものの
過去「けり」体　係助　断定「なり」用　下二・用　係助　四段・体　主格
あんなるを、いかで**見**ばやと**思ひ**つつ、つれづれなる
伝聞「なり」体　上一・未　四段・用　ラ変・体　副詞　接助　形容動詞・体
昼間、宵居（よいい）などに、姉、継母などやうの人々の、
連体修飾格　主格
その物語、かの物語、光源氏の**あるやう**など、ところ
連体修飾格　名詞
どころ**語る**を**聞く**に、いとどゆかしさ**まされ**ど、
四段・体　四段・体　接助　副詞　名詞　四段・已　接助
わが**思ふ**ままに、そらにいかでか**おぼえ　語ら**む。
四段・体　形容動詞・体　係助　下二・用　四段・未　副詞　推量「む」体
いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を**造り**て、
形容詞・用　形容詞・体　四段・用
手洗ひなどして、人まにみそかに**入り**つつ、
サ変・用　形容動詞・用　四段・用
「京にとく**上げ**給ひて、物語の多く候ふなる、ある
下二・用　形容詞・用　伝聞「なり」体　副詞　ⓢ作者（主人公）→薬師仏　Ⓣ作者（主人公）→薬師仏
限り**見せ**給へ。」と、身を**捨て**て額を**つき、祈り**
下二・用　ⓢ作者（主人公）→薬師仏　下二・用　四段・用　四段・用　四段・用
申すほどに、十三になる年、**上ら**むとて、
ⓚ作者（主人公）→薬師仏　四段・体　意思「む」終　四段・未
九月三日、**門出し**て、いまたちといふ所に**移る**。年ご
サ変・用　完了「つ」体　四段・体　四段・終
ろ**遊び　慣れ**つる所を、あらはに**こぼち　散らし**て、**立ち**
四段・用　下二・用　形容動詞・用　四段・用　四段・用　四段・用
騒ぎて、日の入りぎはのの、いとすごく**霧り　わたり**たる
四段・用　同格　形容詞・用　四段・用　存続「たり」体　四段・用（補動）　存続「たり」已
に、車に**乗る**とて、うち**見やり**たれば、人まには参り
四段・終　過去「き」体　四段・用　四段・用　ⓚ作者（主人公）→薬師仏　存続「り」体
つつ、額を**つき**し薬師仏の**立ち**給へるを、**見捨て**
四段・用　ⓢ作者（主人公）→薬師仏　打消「ず」用　自発「る」用　下二・用
奉る、悲しくて、人**知れ**ずうち**泣か**れぬ。
形容詞・用　下二・未　四段・未　完了「ぬ」終

東路の道の果てよりもさらに奥の方で成長した
人が、どれほど見すぼらしかった（田舎っぽか
った）だろうに、
どうして思い始めたことであろうか、世間には物語
というものが
あるという、それをどうにかして見たい、と思い
ながら、手持ち無沙汰な（これといってやること
のない）昼間、夜遅くに起きているときなどに、
姉や継母などのような人々が、
あの物語、この物語、光源氏の様子などを、ところ
どころ語るのを聞くにつけても。ますます知りたい
気持ちがつのってくるけれども、
自分の思うように、どうして（姉たちや継母が）
暗唱して語ってくれるだろうか。
ひどくじれったいので、等身の薬師仏を造って、
手を洗い（身を清めて）、人のいない間にこっそり
と（部屋に）入って、
「京に早く上京させなさって物語がたくさんござい
ますという、そのある限りを見せてください。」と、
身を投げ出して額を床について、祈り申し上げる
うちに十三歳になる年、上京するということ
になって、
九月三日、まずは門出をして、いまたちという所に
移る。
長年遊び慣れた家を、（外から）丸見えになるほど
壊し乱して、
大騒ぎをして、日の入りで、たいへんぞっとする
くらい霧が立ち込めている時に、
牛車に乗ろうとして、目を向けると、人のいない
間にお参りして、お祈りしていた薬師仏が立
っていらっしゃるのを、見捨て申し上げるのが、
悲しくて、（私は）人知れず泣いてしまったのだ
った。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/